

“マネジメント視点”から生まれた 看護師のユニフォーム

メーカーと病院看護部が協働し、
患者への価値を高める機能とデザインを形に

近年、看護師のユニフォームは、機能性、デザインなどの選択肢が増えています。しかしこれまで、ユニフォームは、動きやすい、体型がカバーしやすい、着脱が楽など、「看護師」側の視点で選ばれることが多かったのではないのでしょうか。

病院で働く医療者の中で最も人数が多く、患者の最も近くでケアを提供する看護師。「患者への価値」を高める上で、その存在は重要です。

このような中、住商モンブラン株式会社では、病院看護部との共同プロジェクトによって、「患者への価値」を高めるマネジメントの視点に基づき、新しい看護師のユニフォームを開発中です。その経緯取材しました。（本誌編集室）

病院のマネジメントにおいて、看護師は重要な役割を果たしています。病院で働く医療者の中で最も多くの割合を占める看護師が着用するユニフォームは、病院のイメージを形作る重要な要素の1つです。ユニフォームは、病院の理念や姿勢を伝える媒体とも言えます。

「ユニフォームを通じて医療・看護の質向上に貢献したい」との思いを持つユニフォーム総合メーカーの住商モンブランの考えを受け、以前から「病院のマネジメントとグッドデザイン」に感心のあった岡山慶子氏（朝日エル）、日本臨床看護マネジメント学会などを通じて多くの看護管理者への教育とコンサルテーションを経験してきた高田誠氏（オーセンティックス）の三者で、2018年8月に「マネジメント視点から看護師のユニフォームを考える研究会」を発足させました。

この研究会に、東京都済生会向島病院の佐久間あゆみ看護部長、取手北相馬保健医療センター医師会病院の藤田あけみ副病院長兼看護部長がメンバーとして加わり、定期的に会議を開催。マネジメント視点に立ったユニフォームのあり方を検討してきました。

「ユニフォームに求められる 3つの視点」とは

研究会の活動は最初に看護師のユニフォームのイメージを出し合うことから始まりました。「動きを妨げない」「着替えやすい」「安全を妨げない」などの必要条件、「信頼性」「寄り添う」「モチベーションを上げる」などの十分条件を洗い出し、

図1 ユニフォームに求められる3つの視点

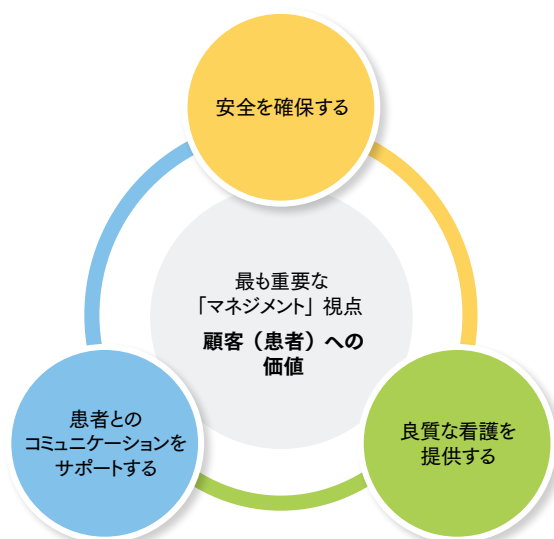


図2 「3つの視点」を基に開発したユニフォームの機能
「マネジメント視点のユニフォーム」に具現化

	機能	患者や 病院全体の 安全確保	患者との コミュニケー ション	良質な看護の 提供
1 PHS 落下防止 ポケット	 ● 日常業務を妨げない ● 患者の安全を確保する	◎		○
2 スマートポケット	 ● 仕分け内ポケットつき膨らみにくいポケット ● 必要なものだけを入れる意識を持たせる ● 感染症対策	◎		◎
3 比翼ファスナー 仕様	● 誰が着ても“きちんと感”がある ● 着脱が簡単（患者に引っ張られない）	○	◎	◎
4 インク染み 防止ポケット	 ● 清潔感、有能感		◎	○
5 透けない生地	● 安心して動ける ● 患者に不快感を抱かせない	○	○	○
6 ストレッチ生地	● 動きやすくストレスフリー ● 日常動作がスムーズ	○	○	○
7 「白」を生かす	● 看護師の象徴である白をアクセントに		◎	○
8 多色展開		○	○	○

NA
REPORT

100以上のキーワードが浮かび上がりました。

それらを基に、患者への価値を高める看護師のユニフォームに必要な要素を抽出し、「ユニフォームに求められる3つの視点」として集約しました（図1）。以下に、研究会がまとめた3つの視点がユニフォームに求める事柄を紹介します。

【①安全を確保する】 患者・医療者の安全や感染管理に役立つことを重視し、看護のさまざまな動きを妨げない機能・デザインが求められる。

【②患者とのコミュニケーションをサポートする】 病院内で最も高い割合を占める医療者として、病院イメージをつくること、また患者・家族から見て、信頼かつ安心でき、話しかけやすいイメージ

を与えることが求められる。

【③良質な看護を提供する】 医療行為を妨げることなく、看護師がモチベーション高く働けること。そしてチーム医療のハブとして看護師が積極的に働くことをサポートすることが求められる。

3つの視点から、機能性、デザイン性を兼ね備えたユニフォーム試作品

集約された内容を基に、住商モンブランでは「ユニフォームに求められる3つの視点」を活かしたユニフォームの試作品を製作（図2）。これらのマネジメント視点に基づき、安全性と機能性を実現するとともに、職位ごとに求められる能力をカラーバリエーションで表現しています（図3）。



写真 1

試着と意見交換を兼ねた会では、住商モンブランの社員が試作品についての説明を行った。

ここでは、工夫された特性をいくつか紹介します。

◎機能性

医療安全や感染管理の視点からユニフォームを見てみると、例えば、ケア時に医療用 PHS が胸ポケットから患者さんの上に落下することを防止する必要があります。また、収容量の大きいポケットは、常時携帯が不必要な物品まで入れてしまうことにつながり、管理上好ましくない場合も

あります。

試作品ではこうした課題を解決する工夫を試みました。まず胸元のポケットには、内側にホルダー力のあるニット素材を使用。医療用 PHS が、ケア時に患者さんの上に落下したり、入浴介助時に水没したりすることなどを防止できます。

またサイドポケットでは、表側から膨らんで見えないような縫製上の工夫がなされたほか、ポケット内に仕切りを作り必要な物品だけの持ち歩きを意識づけるような工夫もなされました。

図3 職位ごとの特性と求められるユニフォームの傾向

	年齢	業務	ユニフォームに必要な要素
看護部長	40代以上が多い	● 対外業務（会議など）で外部の人と接する機会が多い ● 臨床現場に出ることは少ない	● 信頼性、責任あるイメージを具現化する ● ポケットなどに入れるものは少ない ● オフィシャルな場面にも対応
看護師長			
一般主任、係長などを含む	20代、30代が多い	● 病棟、外来などの現場で患者に接する ● 使用する物品、道具類が多い	形状として、動きやすい、機能性が高い、安全性が高い（引っかからない、入れたものが落ちない、必要なものは入るがケアを妨げない、など）
その他	● 看護師の専門性（専門、認定看護師など） ● 診療科特性（母性、小児／ICU、HCU など）	通常の看護業務のほかに専門的な業務がプラスされる	● 母性、小児などはよりやわらかく優しいイメージ ● HCU などは機能重視の中に専門性、優しさ



藤田看護部長

写真 2

取手北相馬保健医療センター
医師会病院での会の様子。病
院から11名が参加した。



◎デザイン性

ユニフォームが患者に与えるイメージは大きく、患者から見て好ましい、親しみやすさと信頼性を兼ね備えたデザインを採用することもマネジメント上の重要な要素です。また、看護師がモチベーション高く、誇りを持って仕事に取り組めることは質の高い看護、患者満足につながることから、各自が「着たい」と思えるユニフォームであることも大切です。

そこで、デザイン面では外から見えない前開きの着脱用のファスナーをつけることで、着やすさや安全性だけでなく、誰が着てもきちんと見え、有能感や「寄り添う」イメージも重視したということです。

看護師であることや職位が患者に分かりやすいことは、円滑なコミュニケーションと良質な看護を提供するためにも必要とされました。

これらの要件はデザインだけでなく色についても検討されました。研究会で考えられたユニフォームは、看護師のイメージカラーと言える白のほか、職位ごとにグラデーションを持たせる提案をしています。淡色は「優しさ」や「寄り添い」を想起させる一方、濃色は「信頼性」「責任感」を連想させます。そこで、一般の看護師は淡色、看護部長は中間色、看護部長は濃色など、色と職位の印象を近付けながら、病院そのもののイメージに合わせ、ブルー系とピンク系を選択し、

色に濃淡をつけることで、統一感と各職位のイメージを表す工夫をしています。

なお、白いユニフォームは、生地を工夫することで透けやすさを解消しました。これは、看護師の着やすさと、患者に与える印象の双方に寄与します。

商品化に向けて2病院で試着・意見交換会を開催

2019年5月、取手北相馬保健医療センター医師会病院と東京都済生会向島病院では、商品化に向けて最終の試着と意見交換を兼ねた会が開かれました(写真1)。

◎取手北相馬保健医療センター医師会病院

取手北相馬保健医療センター医師会病院では、藤田看護部長を含む11名が参加しました(写真2)。

参加した看護師はユニフォームを実際に試着した後、さまざまな視点から意見を交換しました。「PHSのストラップが肌に直接当たらないように襟が工夫されていた。通常ストラップを洗うことは少ないため、衛生面、感染管理面からストラップが肌に直接つかないデザインは好ましい」「胸元のポケットは、PHSが落下しづらく、取り出しやすいように工夫されていた」など機能面への感想が数多く聞かれました。また、これまで着たことのなかった色のユニフォームを試着して、前向き



佐久間看護部長



写真 3

東京都済生会向島病院での会のもよう。病院から12名が参加した。

な気持ちになったといった声も上がりました。

スタッフのコメントを受けて藤田看護部長は、「当院ではユニフォームを各自で選べるようにしていますが、看護師の動きやすさなど、“作業着”としての利点を優先していたかもしれません。今回この研究会に参加したことで、“患者のことを一番に考える”という視点に改めて立ち返ることができました。また、看護師自身が元気になるカラー、患者を元気にできるカラーを知ること、患者への価値創出に活かせるのではないかと感じました」と述べ、意見交換会をしめくくりました。

◎東京都済生会向島病院

東京都済生会向島病院では、佐久間看護部長を含む12名が参加し、やはり試着を行った後に意見を交換しました（写真3）。

機能面では、「胸ポケットは筆記用具やPHSなどを詰め込みがちだが、このユニフォームはPHS専用になっているのがよい」「両サイドのポケット内部がインク染み防止加工になっているのはよいが、筆記具を入れるときにインクが付きやすいポケット口にも加工があるとよい」など、具体的な意見が聞かれました。

デザイン面では、「高齢者が多い病棟では、認知機能が低下して白いユニフォームは認識しにくい」「仕事ができる印象を与えるのは濃色だが、小児などの診療科では明るい暖色系がよい」など、

診療科により色や機能のニーズが異なるという指摘がありました。また、同院ではユニフォームを統一採用しているため、誰でも似合うことや、1着で信頼感と患者に寄り添うイメージを兼ね備えることも重要、との意見もありました。

佐久間看護部長は、「職位による業務の違いも考慮したカラーやデザインのバリエーションがあるのがよいですね。対外的な業務が多い看護部長のユニフォームは、オフィシャルな場面にも対応でき、信頼感を与えるデザインが望ましいと思います」と話しました。

*

住商モンブランでは、約1年にわたる研究会活動の成果や意見交換会での意見や要望を踏まえて、商品化に向けた最終調整を行っています。2020年1月には、新ブランド「プロフェッショナルプライド」として、ユニフォームを発売する予定です。

この取材を通じ、マネジメント視点から開発されたユニフォームを着用することで、1人ひとりの看護師がさらなる看護の力を発揮できる可能性や、医療の質、病院のイメージの向上に貢献できる可能性を感じました。読者の皆さんも、毎日着用しているユニフォームを、マネジメントの視点から見つめ直してみてもはいかがでしょうか。